

子供時代が次第に長くなるといふのは、自然の勢である。社會の發達と共に、義務教育の延長されて行くのも、全くこの理由に外ならないのである。近世文明社會の一員として、十分之に順應して行くためには、長い間各方面から種々の教育を受けなくてはならぬやうになつて來て居る。殊に頭腦を

使用する仕事を以て世に立たんとする人は、長い子供時代を經過しなければならぬ。人生五十といふが、文明の進歩はその半以上を子供時代として過ぎなければならぬやうな形勢を齎らして來た。種々の社會問題は多くこゝから起つて來る。

學齡前兒童の發達と教養(二)

文學士 入澤 宗壽

三、模倣及び社會化の時期

(二歳の始より三歳の終りまで)

此の時期の状態と一般的特色。兒童は今や各種の感覺と周圍の事物とに馴れて、茲に周圍のものの中でもつと變化の多い事物特に人間から新しい經驗を得やうとするに至る。外界の事物は多く靜止して居るから、早くその特質を了解するが、人間は活動して居り、變化があり、且事物のやうに

兒童の思ふまゝにならないから、絶えず興味を起させ、且興味を段々と増して來させる。

第一期よりも大に複雑な模倣が起り又それが正確になされるのは此の第二期の特色である。聲の調子や、笑ひ、叫び其他顔面の表情が模倣せられる。これは一年半位の女兒に於て最も著く行はれる。此の模倣本能が遊戲及び好奇心の本能と聯合して此の二年間に兒童は人間として意識を持てる

動物となるのである。

此時期に家庭の關係から離された兒童は、如何によく注意されても不完全なる發達しかなし得ない。これ家庭の親密なる關係に於ての個々の人と觸接を缺くからである。通常の家庭に於ては兒童は此二年間に言語を覺えて家庭てふ小社會の一員となり、家庭内の人々と及び他の二三の人と色々な社會關係を形成する。此時期は實に家庭の陶冶的影響が最も著しく働く時期であるのである。

模倣と社會意識。模倣は此の時代に最も著しく働く作用であつて、これが或る度まで兒童の好奇心と遊戲心とを支配する。兒童がなす行動の大部分は多く他人の行動から示唆されるものである。模倣の傾向が如何に大なるかは彼が苦痛を感じることも再三再四それを繰返すのを見てもわかる。例へば汗が暑くて非常に苦痛を感じても他人がこれを飲むが故に我慢して自分もそれを飲むものである。

表情は最も早くから模倣せられて、従つてそれに伴ふ感情も或る度まで兒童に感得せられる。かくて兒童は他人の行動よりもその精神状態を認知し得るやうになつて、茲に物質的刺戟よりも一層社會的、精神的影響を受けるやうになつて來る。最初は唯客觀的に模倣したものが或る度まで精神的に模倣する。兒童は、目的にも本能的にも一の社會的存在物であつて、彼が周圍の社會的及び心的刺戟から多大の影響をうける。模倣は行動を學び知識を收得するに大なる助けをなすものであるが、それよりも兒童を心的環境に引き入れ、その精神的生活を形成する事に一層多くの働きをなす重要な作用である。

共通意識と社會的感情。此の第二發達段階に於ては最初は自己と他人とを區別する自我意識なるものは存在しないで、寧ろ他人と共通な意識を持つて他人がする事に引き入れられる。笑ふこと乃至食ふことでも非人格的で他人のした事を自分が

した事のやうに感じる。斯かる状態は通常の場合
は一年間、或る場合には二三年も續いて居る。兒
童は周圍の人が樂しむものを樂しみ、自分の樂し
みを他人が樂しむ事を望み、自分の苦しみは他人
の慰めに依つて止める。この時期に於て他人の愉
快と賞賛の表示は或行動を續けるに最も大なる刺
戟となるものである。此の状態が快活と内氣の生
ずる點で前の段階に於ては新事物と始めての人間
には恐れを感ずるに過ぎなかつたものが、此の段
階には始めて逢ふ人からの賞賛非難を氣遣つて行
動するやうになる。此の時期に社會的刺戟に感じ
易い兒童にして不適當な非難の經驗を多く有した
場合には不幸なる生涯の結果を残すに至るもので
ある。

或兒童は羞耻と見えを張る兩方面を持つて居る
が、兒童の中にはこれらの社會的感情を全く缺い
で居るとか又はその發達が晩くてこの時期には他
人の賞賛に全々無頓着なものがある。彼等は身體

上の愉快を與へるか苦痛を蒙らせるでなければ一
向動じない。かゝる兒童は一見、動物と同じ賞罰
の手段によるの外ない様であるが、此の社會的感
情の缺乏は、兒童の周圍に居る人々の不親切な取
扱ひや表情の缺陷に本づくか又は社會的經驗が多
過ぎて心的發達を後れたものである。こんな場合
は家庭の中で育つた子よりも孤兒院等の建物の中
で大きくなつた兒童に多い。

社會的觀念と自我觀念の發達。兒童は此時期に
於て夙に個性を示し客觀的の事物にも社會的影響
にも屢反對をなすけれども、この際に個性は意識
的のそれではない。兒童はこの時その精神的状態
を他人及び他物と共有して居つて、自他の區別が
分明でない。自我觀念の發達に大なる働きをなす
ものは言語であつて、兒童は人名によつて他人と
自己とを區別し又それが事物との區別をもなさし
める。「吾」汝等の言葉がこの方面に役立つ。

品性の萌芽特に感情的生活が發達するものは此

の共通意識の時代に於て著しい。兒童は他人がな

ある。

す如くに發動し、周圍の人の音調や身振りにあら

かくして此の時期に於て最も重要な二つのも

はれた感情を或度まで自分にも引受ける。恐怖の

のは(一)兒童と其の周圍の人々との愉快にして同

如き、かくして此の期に外部から教へられる事が

情に富める關係(二)望ましき行爲の習慣形成に都

多い。世間では屢々本能とせられ先天的のもの

合よき一致的狀態及び取扱である。而してこの期

せられる多くの特質は明らかに此時期中に周圍の

間には服従といふことは意識的の執意といふより

人の行動から取り入れられたものである。それが

は一層習慣上の事柄たる可きものである。

自覺的に記憶には残らないでも、印象の結果が殘

言語の收得と觀念。一層特殊的、個性的な共通

つて永久に性格の中に組み入れられる。恐らく生

意識が取り入れられる媒をなす言語が大速度で收

涯中に於て、此の時期ほど即ち他人の精神生活を

得されるのは又實に此の時期の間である。共通意

取り入れる此の期間ほど兒童の感情性に取つて從

識の感情的方面は自然的の表示の媒によりて發達

つて品性の基礎に取つて重要な時期は無いので

するが、その知的方面はそれよりも一層人工的な

あらう。兒童を取り圍める人々の精神や、家庭の

言語が收得される事に於て發達する。かくして話

風儀等が最も深く兒童の性質中に這入り込んでそ

す事を學ぶのと知力の發達とは甚だ密接な關係に

の一部を形式する事の著しいのは他の時期には見

立つものである。

ない所である。かくて身體の健康は、身體のため

兒童は他人のなす事及びその精神状態を受け入

のみで無く、感情、氣質、性格に關する生理的動

れる場合に唇の動き方、聲の具合に注意してその

搖の結果として此の時期に大に注意を要する所

行動と音聲とを模倣する。かくして他人の意識を

受け入れる新しき方法が茲に開ける。言葉を話すことは最早や單なる口の遊戯ではなく又餓と望みを訴へる手段のみでなく、精神上の經驗を取り入れる手段となつてくる。

兒童は一方事物と行動の名を求めて自分の單語を殖やすと共に、他方他人の言語が絶えず彼の注意を惹起して茲にその觀念が數を増し、又その意義と關係とが漸次明瞭になつて來る。言語がなければ兒童は動物の如くに一定の小數のものしか知らない譯であるに、言語によつて彼は周圍にある凡ての事物を學び、それから他の所にある類似の事物を知り、同一と差異を知り、茲に一つの精神内の組織を形成するに至る。かくて他の動物や前期の狀態から全く進んだ存在物となるのである。

知覺と心像。知的發達から見て此の第二期は言語收得の時代たると共に又感覺的知覺と心像形成の發達について著しい時期である。前の時期に於ては事物は一定の場所に於てのみ知られるので例

へば兒童に取つて最も大切な母の胸の如きもたゞ觸接することに依つてのみ認められ、母自身は觸覺音聲や身振によつてのみ母たるを認めて全體の母の形に就いては何も知らないのである。然るに一年が終るに頃なれば、兒童は各感官で同一化することを覺え、漸次何れの感覺を通しても認識するやうになる。

各感官に於ける知覺の聯合も亦社會的暗示から來ることが多い。他人の行動によつて示される特色が兒童の對象の方面を定める。善良・快適・美麗・危險等の觀念はかくして社會的暗示によつて或點まで形成せられる。言語も亦社會的暗示の重要な手段で、これに依つて兒童は感覺的知覺の發達に於て動物を超越ること多大の域に達するのである。

兒童に於て、最初は他人から言語を話されて後に腦の活動が起るのであるが、後には事物によつて直接そのもの、觀念が精神の中に起つてくる。

かくして後には言語や事物によつてのみで無く他の心像からも或心像を喚び起すやうになる。此の發達時期に至れば斯かる實物から離れた心像が形成せられて兒童は千も二千もの言葉を覺えるやうになるのである。固より是等の觀念は特殊の經驗から離れたものでは無く、前の經驗と結び付いて居るのであるが、これら日常の經驗を土臺にしてお話の風につゞれば、此の期の後半に於ては兒童はその話を辿り得るものである。

記憶。此の時期中、習慣が大に形成せられるもので記憶といつてもそれが果して意識的習慣以上のものであるか否かを決定することは困難である。併し、三年の終りに近けば數日前、數週前若しくは數ヶ月前に起つた事柄でも、それを話し得るのを見れば、これは明らかに眞の記憶であつて時にはそれがずつと後までも記憶せられる事があつてゐる。たゞし通常は三年以前の記憶を有する人間は稀である。

想像と思考。兒童が心像を形成する能力の發達につれて、直接の感覺的刺戟から獨立して過去に最も興味を惹いた經驗を再生するやうになり、此の内的活動が此の時期に漸次盛になるが固より次の時期ほどは著しくない。かくて兒童は認知して暫く經た後にそれを模倣することを始め、漸次それが演劇的になつて單に再生するのみでなくなる。かくして此の時代にも自己の經驗と人から聽いた物語に基いて僅かの想像のお話をするやうになる。

此の期の末には兒童の概念の數は中々多數であるが、通常は知覺的、心像的時代のものたるを免れない。併し兒童は事物を區別する事をなし、時には二三の特殊事項から概括しやうと試みるものさへある。「お父さんも行く、お母さんも行く、姉さんも行く、誰も行く」の如きがそれである。又言語上の類似差異の點から或る種の概括及び推理を行ふのも之を見る所である。固より其處に一般

的抽象的の思考なるものは殆んど無いけれども、此後に於ける一層一般的で抽象的な思考の準備たる習慣及び觀念形成の發達は大に存在して居るのである。

以上カークバトリック氏が第二期について述べて居る要點を紹介したのである。これから一言これに對する教養上の注意を述べて見たい。

教養上の注意。一般に此の時期に於て注意すべきことは善良なる境遇を作つてやることである。

模倣の盛な時代外圍の人の影響を受け易き時代として最も深き注意を要するのである。品性の萌芽たる感情的作用の形成さるゝ時代として特に然りである。カ氏も説いて居る如く家庭の必要は實に古來から何人もこれを稱へたところである。ルツソオがこれを閑却したのは家庭が良影響を興へないやうに腐敗し切つて居ると信じたが故に家庭から離して教育しやうとしたので、家庭の改良、母の愛の重要は彼がエミール中に極論して居る所で

ある。實際無知なお守に任せて惡影響を受けさせては何等家庭の効を見ないのである。伴侶、周圍の吟味は實に――古來見識ある人士の叫んだ所で又現時生物學社會學兒童學の理論の教ふる所である。かくて賞賛と非難、賞罰の取扱も大に考慮を要す可きものとなつて來る。理想論者はこれらの手段を毛嫌ひするけれども、個性によつては體罰も必要で、又賞が倫理的に價値がないとして排する如きは嚴肅說に捉はれたものである。兒童は功利論者である。故に最初は幸福論で導いて行くのが正當である。たゞその目的と到着點は唯心論にあること忘れなければ宜しい。賞賛と非難との効果多きことはカ氏も認めて居るが、これは十七八世紀に於て多くの教育思想家が系統的でなくとも兒童觀察に基いて極言して居る所である。吾人は飽くまで形式倫理に捉はれないで兒童の發達段階に伴へる取扱をせねばならぬ。

知育の方面に就いては之れと或は反對したとも

思はれる注意を力説したい。といふのは児童をあまり見くびらぬことである。或論者は思考作用の如きは最も遅く發達するもので児童には思考がないとさへいつて居る。併しカ氏もいへる如く論理的思考の萌芽は此の期にも明らかに認めれる所で、區別と比較てふ根本の作用はこの時から注意してやらねばならぬ。固より發達に叶つた取扱が重要ではあるが、この時代から明晰なる思考の基礎を作らなければならぬ。といつて決して難きを求めるのではない。感官の練習と共に感覺を土臺に置いた思考の萌芽の涵養に都合よき状態に児童を置かねばならぬ。思考の發達に重要なものは言語であるから、言語に關する注意、及び事物の直観が

ら得る區別、比較の注意、即ち材料を提供するに努めねばならぬ。といつて固より此の期に思考の修練などは或意味に於ては不可能であるが、それを取扱者は眼中に於いて材料即ち事物の供給を豊富にして児童の知力むしろ直観練習の機會を造つてやらなければならぬ。一言にしていはば児童の能力が發達しないといつて手を拱いて居ないで、發達した方面を考慮に入れて分相應の取扱をせねばならぬ。かくて茲には誤れる児童心理に捉はれないことを注意したい。詳しくいへばあまり長くなるから一般的の注意に止めて置く。次回は第三期即ち幼稚園児童の發達と取扱とになるから、今少しく詳細に述べて見やうと思ふ。(つづく)

『ジエーン・アイア』(三)

|| 英文學に現はれたる子供(十五) ||

岡 田 み つ

ジエーンは自分とロイド君との對話から、又

シーとアボットとの物語から推して、病氣を癒さ